福島県立図書館
東日本大震災福島県復興ライブラリー

ブックガイド

No. 10　　2014.9.12

■放射線　除染

『みんなで学ぶ放射線副読本　科学的・倫理的態度と論理を理解する』
後藤 忍／編著　合同出版株式会社　2013.3　LS543.4/G13/1

震災後の2011年10月、文科省は放射線副読本を各小･中･高校生向けに発行しています。しかし、もっとも重要な福島第一原発事故のことについて、ほとんど触れられていません。そのことを意識して書かれたのが本書です。

母親の立場で、放射線について分かりやすく書かれた本を選ぶとしたら、こちらをおすすめします。副タイトルにあるように、情報を鵜呑みにしない判断力を育てることの大切さを貫いています。

『はかる、知る、くらす。　子どもたちを放射能から守るために、わたしたちができること。』
服部夏生／編　こどもみらい測定所　2014.3　LS543.4/H30

放射線の基礎知識や身近な放射線量の測定を続けることの重要さが、専門家の解説とともに紹介されています。国際協力NGOセンターやこどもみらい測定所などが共同で作成。

「第3章「これから」をくらすために」では、福島で放射能とともに暮らすポイントをイラストとわかりやすい文章で解説しています。

■農林水産業　動物

『農と言える日本人　福島発・農業の復興へ』
野中昌法／著　コモンズ　2014.4　LS612/N4/1

農学者である著者は、震災以後、何度となく福島の地を訪れ、現場を歩き、農家の声に耳を傾けてきました。本書では、理不尽な現実に前向きに立ち向かっている農家の人々を紹介しています。また、生涯をかけて足尾鉱毒事件と闘った政治家・田中正造や医者の立場で水俣病の被害者支援の中心であった原田正純さんの実践にふれ、過去の教訓に学ぶことの大切さについても述べています。積み重ねられた研究と実践に支えられた言葉が、心に響く一冊です。

『いちご畑をもう一度　3・11復興の軌跡』
森 栄吉／著　潮出版社　2014.3　626.29/ﾓﾋ143/

東北最大のいちごの産地・宮城県亘理町で40年近くいちごを作りつづけてきた著者。3.11の津波被害ですべてを失ってから、復興へ向けての挑戦の記録がまとめられています。土地を離れる農家も多い中、自分の生まれ育った土地で再びいちごを作りたいという強い思いを持つ著者が、どのようにいちご畑の復興に取り組んだのか、またその時どんな気持ちだったのかが丁寧に、率直な言葉で書かれています。

■エネルギー

『文系のためのエネルギー入門　バークレー白熱教室講義録』

リチャード・A.ムラー／著　早川書房　2013.12　501.6/ミリ13Z/

原発事故以降、エネルギー問題への関心は高まっています。そこで、現代に生きる私たちが知っておくべき最新のエネルギー事情を、難解な用語や数式を省いて理解しやすく仕上げたのが本書です。カリフォルニア大学バークレー校で著者が行った5つの講義を収録し、その内容からは「世界の未来を担うリーダーたちが適切な判断を下すためには、どうしてもエネルギーの基本的な知識が必要だ」という熱い思いが伝わってきます。原発を止めた日本が次にどのエネルギーを使うべきかについても触れられており、著者と学生の真剣な語らいは必見です。

■こども向け

『泥だらけのカルテ　家族のもとに遺体を帰しつづける歯科医が見たものは?』

柳原 三佳／著　講談社　2014.2　489/ヤ

2011年3月11日。診療所で被災した歯科医師は、海水に浸かったカルテの泥を丁寧に落とし、壊れたハードディスクを復元しました。それらが今後、とても大切なデータになることが分かっていたからです。

本書は震災後、遺体の歯とカルテを突き合わせることで、行方不明者の身元特定に尽力する医師のドキュメントです。被災した場所に残ることを決め、「最後のひとりまで」と誓う医師の決意は、人々が復興へ向かう力となったようです。

■文学　体験記

『母子避難、心の軌跡　家族で訴訟を決意するまで』

森松明希子／著　本多利子・中島宏治／寄稿　かもがわ出版　2013.12　LS916/M19/1

郡山市から大阪市に母子避難した著者が、震災と原発事故を受け、子どもの将来を考え、避難をするまでの経過、避難してからの心の軌跡が書かれています。葛藤と苦悩のなか、「避難したからもう終わり」ではなく、毎日が「避難を続ける」という決断の連続だという著者の切実な言葉。避難してもしなくても、子を想う気持ちは同じ中で、お互いの気持ちに寄り添うことの大切さを感じます。

■その他

『生命と風景の哲学　「空間の履歴」から読み解く』

桑子敏雄／編　岩波書店　2013.12　519/ｸﾄ13Z

「地を這う哲学者」と呼ばれた著者が、日本国土に蓄積された風景の物語をたどることにより「危機に備える神話」を伝えています。3.11以後の原子力災害について、科学者・技術者が原子力発電の限界を語らず「安全神話に陥っていた」と非科学的なものの代表としての「神話」を引き合いに出して弁解したことを批判。古来より津波を免れた場所や治水上の要衝に神社があることなどを示し、本来「神話」とは予測を超える自然災害に備え待つべき教訓として伝えられていると述べています。哲学・倫理学から環境や原発を考える注目すべき一冊といえます。